

楽譜

図書館の魅力

演奏学科 鍵盤楽器専修4年

永嶋千晴

みなさんにとって図書館とはどんな場所でしょうか？

素敵な本に出会える場所、静かに勉強が出来る場所、うっかりすると眠ってしまう場所(?) :色々挙げられると思いますが、私は絶版になってしまった資料でも、気軽に借りられる場所ということが、図書館の魅力のひとつではないかと思っています。

私が今紹介したいのも、既に絶版となつてしまった『ピアノ・ポップスセレクションI ポピュラー編』という楽譜です。これはシリーズもので、『II クラシック編』、『III 日本のうた編』は持っていたのですが、ポピュラー編は手に入れることが出来ず悔やんでいたときに、図書館で出会うことが出来てとても嬉しかったです。

この楽譜のシリーズの良いところは、誰もがどこかで耳にしたことがあるような有名な曲が多く、ピアノ初心者でも簡単に演奏が出来る点だと思えます。私は、上手く演奏が出来ずに落ち込んでしまったときや、練習になかなか気が向かないときに、クラシック以外の曲を弾くとなんとなく気分転換になることがよくあるので

ですが、ピアノ・ポップスセレクションのシリーズは特別な譜読みも練習もいらず、ただただ音楽を楽しむことが出来るので、お気に入りの楽譜となっています。

今回借りた『I ポピュラー編』は『ムーン・リバー』『雨に歌えば』といった有名なミュージカルの曲や、『星に願いを』『追憶』、ビートルズの『イエスタデイ』などといった映画音楽、洋楽のアレンジの曲が多く、普段大学ではあまり勉強しない音楽に触られて、とても新鮮な気持ちになれました。出会えて良かった一冊となっています。

楽譜は欲しいと思つて購入しようとしたときには、既に絶版になってしまつてしまつても多いように思います。絶版になってしまつていても素晴らしい楽譜はたくさんあるのに、なかなか人目に付かないのはなんだかもつたいないですね。図書館をきっかけに、素敵な曲をたくさんの人に見つけてもらえたらと改めて感じます。



「ピアノ・ポップスセレクションI
ポピュラー編」服部克久編
NHK出版 1990
請求記号●G22-995
*品切れ増刷予定なし

●ながしまちはる 最近本当に涙もろくなりました。アンパンマンを見て涙が出てきたときは自分でもびっくりしました。

図書

あなたはだれ？

音楽文化デザイン学科 音楽研究専修4年

砂川巴奈歌

「あなたはだれ？」

こんな問いに、みなさんは即座に答えることが出来ますか？

本書は、大人になつた私たちにはごく当たり前となつてしまつた、この世界の不思議さや気づくことができる本かもしれない。

主人公ソフィー・アムンセンはごく普通の少女。ある日「あなたはだれ？」とだけ書かれた手紙が届き、おもいがけない質問にソフィーは当惑します。「あなたはだれ？」、「世界はどこから来た？」次々と送られてくる消印も差出人の名もない謎の手紙によつて、ソフィーは自分は何者なのか、世界とは何なのか、というこの大きな謎と向き合いながら哲学の世界へと入っていきます。

ミステリアスな物語を通して、西洋哲学史を概観することができるこの本は、1991年の出版以来、「一番やさしい哲学の本」として世界各国でロングセラーとなりました。著者のヨースタイン・ゴルデルはノルウェー出身で、高校の哲学の教師を務めた後、作家として活動しています。哲学ファンタジーを題材とした作品が中心で、『鏡の中、神秘の国へ』(1997)『カ

エル城』(1998)などの青少年向けの作品をはじめ、『レネーの城』(2013)(いずれもNHK出版)など、大人の読者向けの作品も、近年日本語訳が出版されています。

私が初めてこの本を手にとったのは小学6年生の頃でしたが、小学校高学年から大人まで楽しめるような分かりやすい比喻で哲学思想が語られ、また、物語の随所に謎解きのヒントがちりばめられており、哲学にあまり興味がない方でもミステリー小説として楽しめる作品です。本書の中で、私が最も印象的だった言葉を最後にご紹介します。

「すべての能力と可能性を花開かせ、存分に利用して初めて人間は幸せになれる」

「人は、いつかはかならず死ぬということを思い知らなければ、生きていくということを実感することはできない。(中略)そして、生のすばらしさを知らなければ、死ななければならぬ」ということをじっくりと考えることもできない。」

読み終わった後、世界が少しだけ新鮮に見える小説です。



「ソフィーの世界 哲学者からの不思議な手紙」ヨースタイン・ゴルデル著、須田朗監修、池田香代子訳、NHK出版 1990 請求記号●J81-455

●すなわけはなか この作品は映画化もされています。

図書

「リズムはゆらぐ」という矛盾？

演奏学科 弦管打楽器専修打楽器4年 八木友花里

音楽をやっている方なら、初めに正しいリズムありきという考え方に否定的な意見を持つ人は少ないと思う。正しいリズムと言っても、メトロノームに狂いもなく合うものが音楽とも言い難い。例えばベートーヴェンの有名なピアノソナタ悲愴の2楽章を何の躊躇もなく淡々と演奏されたら違和感がある。正しいリズムとは何なのか。

音楽において大きな役割を占める要素であるリズムについて取り上げて勉強する機会は多くないと思うので、今回は本学を卒業された藤原義章さんの「リズムはゆらぐ」という本を紹介したい。この本は私が読んだリズム研究の本の中では分かり易い図や譜例がたくさんあり、数多くのオーケストラでの実体験を踏まえて書かれているため、イメージが湧きやすい一冊だった。

この本は私の生まれる2年前の1990年に出版されており、その当初日本の義務教育課程においてリズムは拍に強弱をつけ、長さは機械的に合わせるといった「強弱リズム論」が基礎となっていたとある。現に私が小学校の時はそのように習い、リズムについて疑問を持つように

なるまでは強ち間違ったことではないと思っていた。ただ、いくら聞いてもオーケストラの弦楽器は正しい音価で弾かないし、ピアノの先生の弾くフレーズはともゆらぐ…。打楽器を専攻していることもあり、普段は主にリズムや音価を生かした現代音楽と向き合い、メトロノームと睨めつこをすることも多く、リズムやテンポは遵守せねばと思っていたからこそ、自分の中ではとても恥ずかしい発見だった。そのような考え方の中で、この本は「リズムはゆらぐもの」という今までの概念を覆した根底について、そしてゆらぐ人間の心をあらかわす音楽の時間感、絶対的な均等時間とは一致させることは出来ないという、当たり前のようで認識しかしていなかった事に対しての隙間を埋めてくれた。

最後に、主にこの本のターゲットになっているのは近代までの西洋音楽である。様々なジャンルに應用の利く基礎であるとは思いますが、現代音楽には現代音楽の、黑人には黑人なりのリズム論などあるはずなので、視野を広げて様々なリズム論を研究してみたく思う。



「リズムはゆらぐ」藤原義章著 白水社 1990 請求記号●C53-306

●やぎゆかり あつという間に4年生になってしまいました。私が2年の時からずーっと借りたかった譜面、未だにお持ちなのはどなたでしょうか…。